

民主主義と教育の 最前線で

人波とその向こうに浮かび上がる国会議事堂、人々の声が刻むリズム。何度も現れた昨夏の風景は記憶に鮮やかだ。日本社会を揺るがせたあのよな政治状況のなかで、わたしたちはあらためて民主主義とはなにか、どうあるべきかと考えを求められた。民主主義とは選挙制度なのか、全国津々浦々の街頭行動は民主主義なのか、そうでないのか。立憲主義とは何か、民主主義とのその関係はどのようなものか、と。

多くの人々の間に投げかけられたこのような問いに加えて、その教育ということになればよりいっそう複雑さを増す。「政治的中立」というけれど、それでは民主政治の擁護は伝えられないのではないか。民主主義を学ぶことが政治的価値の強制であってはならないとすれば、どのような学びであればいいのか。こうした問いは学校現場からすればやや抽象的にすぎるとは思えないが、今年、18歳に選挙権が拡大されることを踏まえれば、現実味を帯び始める。

若者の投票率の低さを嘆く月日はすでに長い。それは、しかるべき政治的教養が培われてこなかったが故なのか、と問えば、その教養とはいいかなるものか、そしてその教養を身につけたのであればそこに立派な主権者が現れるのか、といった疑問が、わが身をふり返ると同時に、わいてくる。なぜ民主主義と教育はこれほどまでに複雑な関係にあるのか。これは教育学における古典的テーマであるが、その最前線は、いまを生きる一人ひとりの学習・研究・体験の場、つまり教室にも街頭にもある。